



→これから1か月ほど、
矢切の渡しのベストシー
ズン。ささやかだが、紅
葉も見られる。江戸川も
穏やかだ。



↑毎年、花を咲かせる皇帝ダリア。今
年は暑さに枯れてしまったが(左)、脇
から芽を出して伸びてきた(右)。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」

人の身体はよくできていて、喉から
下の神経は鈍感になっている。熱いお
茶を飲んでも、胃にはいると熱さを感じ
ない。これから転じて、苦しかった
ことも過ぎ去れば忘れてしまふ、苦し
いときには人に頼り、乗り切ってしま
うと人の恩など忘れてしまふ、などの
たとえに使われる。

暑かった夏も嘘のような日々が続い
ている。いつもの三倍もしていた葉も
の野菜も、いつきに半額以下に下がっ
た。おかげで高値感も薄れてきた。

消費税が三%のときも、五%のとき
も、あれほど大騒ぎをしたのに、いま
はあたりまえ。それどころか、十%で
も十五%でもしかたがないと思いはじ
めている。

たぶん、しかたがないのだろう。

「うちなんか、どうするのよ」

若舟頭は複雑な心境のようだ。

三%のときも五%のときも上乘せし
なかつた。だったら納税時、その分だ
け免除してくれるかという、それは
許されない。

今週のクマ

→暑いときに舌を出してあえぐのはわかるが、物を食べたわけでもないのに、舌なめずりをするのは、どうしてだろうか。ただの癖なのか、なにかを要求しているのだろうか。



↑ 放置されていた風呂桶に飛び込んだカマキリのお尻から、ハリガネムシが這い出した。水がないので死んでしまった。

もう三十年ちかくも値上げをしていない。百円のままだ。

「三円値下げをして、次に五円値下げをした。また値下げをしろって？ こんどはダメだろうな」

若舟頭は頭を抱えている。

そんなこととは無関係に江戸川はゆるゆると流れている。

「ま、なるようになるさ」

最後は投げやりの言葉でしめた。

そういえば、葉っぱが茶色に焼けてダメかと思われていた皇帝ダリアが、あらたに脇芽を出して伸びてきた。

茎が焼けなかった皇帝ダリアは、重ね餅のように新しい葉っぱを広げて花を咲かせようとしている。

植物はあきらめない。残された時間がたとえ短くても、せいっぱい生きようとしている。知り合いになった和歌山で田舎暮らしをしている方のブログを見ると、ミョウガの花が咲いているし、矢切ではヘチマの花が咲いて実をつけているし、オクラやモロヘイヤの花もいまごろ咲いている。こういのを「帳尻合わせ」といえなくもないが、生き物はけして命あるかぎり生きることをあきらめない、ともいえる。